

阿部彩『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波書店 2008 年

第 6 章 子どもにとっての「必需品」を考える

・問題提起

「不利な状況を背負って生まれてきた子どもたちが、そのハンディを乗り越える機会を与えられない社会とは、どのような社会なのであろうか。自らが属する社会の『最低限の生活』を低くしか設定せず、向上させようと意識しないことは、次から次へと連鎖する『下方に向けてのスパイラル』を促し、後々には、社会全体の生活レベルを下げることとなる」(P210、L4～8)とあるが、これは日本の教育への意識が低いことで起こっている。では、どうすれば教育への意識が高まり、ハンディを乗り越えることができる社会になるのか。

・選んだ理由

現在の日本は「子どもの最低限の生活水準」が非常に厳しく「教育の平等」や「機会の平等」が支持されない社会である。それがゆえに、所得の低い子供は十分な教育が受けられない。所得の低い子供でも平等に教育を受けることができれば、貧困の連鎖はなくなり生活レベルは向上し子どもの剥奪状態も改善すると思ったから。また、筆者も貧相な貧困観を改善しないといけないと言っているから。

・第二の問題提起

所得の低い子どもの勉学意識が向上したとしても、費用が高いため進学が難しいと考えられる。では、その子どもたちに対して何ができるのであろうか。

A グループ

一つ目→進学のメリットを保護者に分かりやすく伝える環境を作る。進学にかかる費用よりも進学の利点の方が見劣りしているため支持率が下がっているのではないかと考える。

二つ目→高等教育の義務教育化

B グループ

一つ目→最低限の生活水準レベルが高いイギリスの状況を国民の目に入るようにし、日本の状況を客観視させ対比させる。また、閾値以下の人々に対しては財政面も考慮して国が進学費用を 5 割負担する。

二つ目→所得が 400 万円以下⇒国が 5 割負担。300 万円以下⇒国が全額負担。

C グループ

一つ目→現在の教育プログラムでは子どもの時に勉強したことが大人になった時に社会に役立っている実感が少ない。そのため、子どもが教育を受ける際に教育が将来役に立つことを具体的に子どもに知らせる。

二つ目→奨学金の給付条件を緩和する。

D グループ

一つ目→今まで学んできたようにすべての親の意識を変えることは不可能なので、小さい時から子どもの意識を低くしないことを目的に「ヘッドスタート」政策を導入する。また、高校教育の義務化、無償化を行う。

二つ目→日本に比べて給付型の奨学金制度に取り組んでいる米国の制度を取り入れる。